

新シリーズ：草の根型協力を考える ～国際耕種のアプローチ

第1回：今、なぜ草の根か？～草の根型協力の意義

途上国援助において、地域住民を開発プロジェクトの主役と考え、プロジェクトの成果が地域住民に直接裨益するために、「住民参加型開発」とか「住民の真のニーズに基づいたプロジェクト」の必要性や重要性が指摘されている。この新シリーズでは、そうした観点から有効な手法の一つであると思われる「草の根型協力」について考え、国際耕種がこの分野にどのように関わっているかを紹介していきたい。

まず「草の根」という言葉から真っ先に連想されるのが「NGO」だが、「NGO だから草の根」あるいは「草の根だからNGO」という(短絡的な)認識ではなく、そういう活動形態が必要だから、あるいはそういう「機能」が必要とされているから、「草の根」とか「NGO」という手法を取る、というような「機能論的に」考えたいと思う。つまり、「NGO」にしても「草の根」にしても一つの「手段」でしかなく、目的がはっきりすれば手段や形態にはこだわらなくても、必要なことは自ずと明らかになってくる。またこのシリーズが、開発援助において「草の根型」アプローチを取る場合の事例作りやしくみ作りを考えるきっかけになれば、とも考えている。

言うまでもなく、「参加型開発」において「住民」がプロジェクトに「参加」すれば、それだけで目的が達成されるわけではない。「参加型開発」の本当の意味は、ただ単に住民が参加するということではなく、なるべく「外部」に依存せず、住民が自分たちの頭で、資源で、人材で問題解決できるようにすること、である。したがって「住民を巻き込む」のではなく、より積極的に住民が主体となって行動し、外部の人間がそれに「巻き込まれていくこと」がプロジェクトの成功や持続性のために必要となる。

ところが現実はどうか？ 金さえあれば、機材さえあれば今抱えている問題は解決できる、という(相手側の)姿勢は、多かれ少なかれこの途上国でも見られる。逆に言えば、いくら「草の根型」、「住民参加型」で住民側(途上国側)の意見を吸い上げようとしても、ドナーに援助されないと実施不可能な意見、要望、解決策(資金が欲しい、機材が欲しい…)しか出てこない。現在の自分達の実力の範囲内で実施できるようなロー・コストのアイデアや実現可能なアイデアは途上国側からなかなか提案されない。

「草の根」とか「参加型開発」のめざすものが、(最終的には)外部からの支援に頼らない「自立的発展」だとすれば、こうした(外からの援助頼みの)「思考過程」そのものに変革をもたらすことが必要になる。結局、住民側(途上国側)に主体性があるのか？という点が重要で、自分たちの頭で考えることの重要性、自分たちのアイデアが実現されていくことのおもしろさに彼ら自身が気づくこと、が必要である。ところがこれは「トップダウン・システム」ではなかなか実現が困難で、その時に外国人が、「外部者」であることのメリットを生かして「現場の人たち」に働きかけて「ボトムアップ」ができれば、つまり「草の根型」のアプローチが取れば、有効な手段となりうる。したがってこれは、「トップダウン方式への挑戦」でもある。

このシリーズでは、国際耕種が過去そして現在までに「草の根型の協力」として、さまざまな途上国で活動しているいくつかの事例について紹介し、その意義や課題、将来の方向性について考えていきたい。